

地域における看護技術（清潔簡潔導尿）の講習会の検討 —受講者（教員・保護者）と技術指導者（学生）への効果—

永石 喜代子¹⁾，福田 博美²⁾，石井 美紀代³⁾，水野 昌子⁴⁾

【要旨】医療的ケアを必要とする子ども達の支援のあり方について，地域における在宅看護の講習会（東京都，名古屋市，北九州市）を実施し，参加者への質問紙調査および聞き取り調査を行い，講習会の効果を検討した。対象者は，講習会参加者の教員，保護者など家族の63名，実技指導および相談活動者として参加した5名の学生とした。分析項目は，医療的ケアのなかで，特に不安や抵抗，嫌悪感が強い清潔簡潔導尿について実施した。その結果，地域における講習会は清潔簡潔導尿という医療的ケアを必要とする子どもへの理解，支援者の自己効力感の向上，医療的ケアの理解や支援意欲を高めた。さらに講習会に参加した学生は，清潔簡潔導尿に対する学生の羞恥心や嫌悪感の減少という意識変容が見られた。このことから地域における在宅看護の講習会は，医療的ケアへの理解，技術向上に効果的であることが示唆された。

キーワード：清潔簡潔導尿，地域/在宅看護，講習会，医療的ケア

1. 緒言

人は元来，自らの力で健康を守ろうとするものという「セルフケア」の考えがオレム理論である。「人々は自分たちで自分たちの世話をすることができる。病気やケアで自分たちでは世話ができなくなった時に，代わりに世話するのが看護である」という考えである^{1), 2)}。医療的ケアを必要とする子ども達は，呼吸，食事，排泄などに伴うセルフケア不足と捉え，その支援者は家族，ヘルパー，看護師や医師，教員，友人，親戚，近隣の人々などである。支援者である家族などのセルフケア能力を向上させるには，「その行動をうまくやれるという自信」，「できそうかな」と感じることができるよう，支援者の自己効力感を向上させる指導が必要である³⁾。

在宅ケアは，療養者と家族の教育・支援を必要とし，保健医療福祉の専門職やボランティアなどの一般の人々と分担しながらチームでケアを提供し，教育など療養者の日常生活に関わる人々が療養者の生活の質を支えている⁴⁾。医療的ケアを必要とする子どもの支援には，地域にお

ける在宅看護のあり方が重要であると考えられる。

著者達のグループでは，医療的ケアを必要とする子ども達の支援のあり方について，地域における講習会を重ねている⁵⁻⁷⁾。在宅における医療的ケアは，基本的には本人，家族が行うことになる。学生への看護教育において，実技ビデオ（大阪府医師会，大阪府教育委員会：『小児の在宅生活支援のための医療的ケア・マニュアル，ミック大阪』⁸⁾）の視聴では，「痛そうで見えてつらい」「自信がない」などの否定的な感想が一部あった⁹⁾。特に，医療的ケアの演習のなかでも，清潔簡潔導尿は不安や抵抗が強いということが考えられた。そこで，地域における清潔簡潔導尿の講習会の効果を検討した。

2. 研究目的

教員および保護者を対象とした医療的ケアの講習会の効果を，受講者や実技指導および相談活動者として参加した学生から検討する。

3. 研究方法

1) 研究期間および対象

講習会は平成18年10月～19年3月に，東京都，名古屋市，北九州市で会場を設定し各会場1日ずつ実施した。参加した保護者，教員等は，二分脊椎症協会および広報において募集した。

平成22年12月6日受理

¹⁾ 鈴鹿短期大学

²⁾ 愛知教育大学教育学部養護教育講座

³⁾ 西南女学院大学

⁴⁾ 公立瀬戸旭看護専門学校

学生は、講習会の説明をして参加者を募り、養護教諭養成課程で、すでに医療的ケアの実習及び臨床実習を修了した学生5名とし、引率教員2名の指導、監督の下での参加とした。学生の役割は、指導者の管理下における実技指導および相談活動とした。

講習内容は、導尿の必要性の概論および手技の説明、導尿モデル（男性タイプ・女性タイプ）、小児万能型実習モデルを用いた清潔簡潔自己導尿の実習であった（表1）。講習会の開始時に保護者と教員へは質問紙調査用紙を他の資料とともに配布し、講習会終了後に質問紙調査用紙を回収した。学生へは講習会終了後に聞き取り調査を行った。聞き取った内容は、KJ法でカテゴリー化、図式化した。

質問紙調査は医療的ケアに関する内容で、自己導尿、経管栄養、吸引などの項目で調査し、本研究ではその中の清潔簡潔自己導尿の項目を分析した。

表1. 講習会内容

内 容	担当者	時間
導尿の必要な疾患の解剖・生理学的説明	医師	45分
自己導尿における日常生活の援助方法	看護師	15分
シミュレータを用いた体験実習	学生・引率教員	90分

2) 倫理的配慮

研究協力者に対しては、研究の目的、研究の方法、研究への参加は自由意志であり不参加による不利益を被らないこと、参加同意した後もいつでも撤回できること、プライバシーが守られることについて文書で十分に説明し、同意書を作成し、同意を得た。また、公表についての許可を得た。

4. 研究1：講習会参加者（保護者・教員等）への効果

1) 属性

講習会参加者の保護者および教員等から、71名の調査用紙を回収し、未回答等の8名を分析対象から外し63名を分析した。63名の内訳は、教員19名（養護学校教諭、一般校教諭、幼稚園教諭（保育士）、養護学校養護教諭、一般校養護教諭）、保護者等44名（両親、祖父母等）であった。

2) 講習前の無菌操作の導尿、自己導尿の経験（見学を含む）の有無

講習会前に、講習会参加者に無菌操作と自己導尿による導尿の見学や実技の経験の有無を質問紙調査でリサーチした。その結果、無菌操作による導尿は参加した教員の4人（19.0%）、保護者の28名（57.1%）が「あり」と回答していた。自己導尿の見学や実技の経験は参加した教員の2名（9.5%）、保護者の15名（30.6%）が「あり」と回答していた。いずれの項目においても保護者が教員等より見学や経験者が多かった。

3) 講習後の意識調査の結果

講習会修了後に実施した質問紙調査の結果を表2に示した。「自己導尿の必要な子どもに対して、医師の研修を受ければ介助できると思う」は、教員、保護者等を合わせて、「とても思う」が38名（60.3%）と最も多く、次いで「やや思う」が22名（34.9%）、「あまり思わない」が3名（4.8%）で、9割強の参加者が「できる・ややできる」と答えていた。

教員と保護者等の比較では、「とても思う」が保護者等は33名（75.0%）と7割強であったのに対して、教員は5人（26.3%）と2割強と低い回答であった。

「自己導尿の必要な子どもへの支援方法を具体的に検討できると思う」は、全体で「とても思う」が40名（63.5%）と最も多く、次いで「やや思う」が22名（34.9%）、「あまり思わない」が

表2 講習会終了後の調査（介助や検討ができるかどうか） 名（%）

質問項目	対象者	（介助や検討ができるかどうか）			
		とても思う	やや思う	あまり思わない	全く思わない
医師の研修を受ければ自己導尿の介助ができると思う	教員(n=19)	5(26.3)	11(57.9)	3(15.8)	0(0.0)
	保護者等(n=44)	33(75.0)	11(25.0)	0(0.0)	0(0.0)
自己導尿の必要な子どもへの支援方法を具体的に検討できると思う	教員(n=19)	9(47.4)	10(52.6)	0(0.0)	0(0.0)
	保護者等(n=44)	31(70.5)	12(27.3)	1(2.2)	0(0.0)

1名(1.6%)で、ほとんどの参加者が、介助できると答えていた。

保護者からの自由記述では、「講習会で実技をしたことでやれそうな気がした。」「今後も講習会に参加して行きたい。」「教員と保護者同士の集まりで励まされた。」と言う内容が多かった。教員等からは「保護者からの声を聞きながら実習したことで、医療的ケアの必要性が実感できた」とのコメントが多かった。

5. 研究2：学生の学び

1) 属性

講習に参加した学生は5名であり、いずれも養護教諭養成課程の最終学年であった。学内で、自己導尿の講義および演習を経験していた。

2) 調査結果

講習会終了後の学生への聞き取り調査を実施した結果から、実技に対する意欲の変化と地域看護における学びを確認した(表3)。

聞き取り調査の元ラベルを分析した結果、8つのカテゴリーと2つの最終カテゴリーが抽出された。8つのカテゴリーは①メンタル面の向上②実践の看護技術の向上③医療的ケアへの意欲向上④対象者、保護者・教員・ボランティアの連携⑤思い伝わる・感じる⑥家族の気持ちが学べた⑦親の要望が理解できた⑧地域看護、講習会開催の必要性)であった。2つの最終カテゴリーは、①意識の変容と②地域看護活動の学びであった。

カテゴリー間の関係を図式化し説明を加えてみた(図1)。

(1) 清潔簡潔導尿に対する羞恥心、嫌悪感の軽減であった。学生の実技に対する意欲の変化が見られた。

講習会で保護者や教員等と一緒に体験談の話の聞きながら実技指導を行って行くと、学内実習以上に真剣になり、羞恥心を感じることはなくなっていた。学内実習やビデオ鑑賞では、羞恥心や嫌悪感があったが、現場の声を聞き、実際に保護者や教員等との触れあいのなかで、自分達も一生懸命になったという確認ができた。また実際に実技をしてみると、個々の障害によって、困っていることや介助の方法が違うこと、個々の観察が重要であり、今後も支援していきたいという気持ちの変化が現れていた。講習会での学びは、学内実習とは違い、他人事ではなく身近な問題として捉えることができていた。

(2) 地域看護の学びがあった。地域活動・講習

会の重要性は、単なる技術だけの指導ではなく、心のケアも必要であること、現場の話を直接聞ける地域看護の学びがあった。地域における講習会の必要性および重要性和保護者や医療機関、学校、学校内などの連携が重要であることを学んでいた。真剣に語る保護者の話を聞いて、養護教諭の地域活動の大切さを学び、地域看護には子どもを守る環境が必要なのだという意欲の向上が見られた。

6. 考察

講習会に参加した者への質問紙調査の結果からは、次のことが明らかとなった。

①医療的ケアへの理解

本研究の講習会への参加者は、導尿の見学や経験を有した者が、教員等よりも保護者等が多かった。これは、今回の保護者等は、二分脊椎症の子どもの保護者がほとんどであり、子どもは導尿が必要な場合が多いことで、保護者の方が教員よりも経験者が多い結果となったと考えられる。しかし、保護者や教員等の経験のない者の中には、自己導尿をためらっていた保護者、家族に必要な人はいるものの援助した経験のない保護者も存在し、今回の講習で改めて医療的ケアの必要性を認識したようである。学生の学びからも、「医療的ケアの必要な子についてのケア内容や技術が大切と思った」「学校現場における医療的ケアは自分には遠いものと思っていたが身近に感じた」などと医療的ケアへの理解が高まったと考える。

②自己効力感の向上

講習会参加者の簡潔自己導尿の必要な子どもに対して、「医師の研修を受ければ介助できると思う」は、教員、保護者等を合わせて、9割という、ほとんどの参加者が、介助できると答えていることから、講習を終えて、「できる」という自信に繋がっていると考える。同様に「自己導尿の必要な子どもへの支援方法を具体的に検討できると思う」は、全体で「とても思う」「やや思う」を合わせて、9割強が、支援方法を具体的に検討できると思うと答えている。

この結果からは「その行動をうまくやれるという自信」である自己効力感¹⁰⁾を向上させたと判断できる。これは、ハンデュラが提唱した学習理論の概念であり、自己効力感を向上させることが、教育・指導に方法として有効である¹¹⁾といえる。

表3 学生の学び—学生への聞きとり調査の結果—

最終カテゴリー	カテゴリー	元ラベル
I. 意識の変容	①メンタル面の向上 (羞恥心, 嫌悪感の軽減) ②実践の看護技術の向上 ③医療的ケアへの意欲向上	導尿へのはずかしさや嫌な感覚は無くなっていった 児童・生徒に何ができるか考えた(成長を考えた) どのように指導したら良いかが, 技術の確認ができた 具体的な技術で困っているかが理解できた 技術もしっかりと覚えないといけないと思った 医療的ケア内容や技術が大切と思った 実際に実施している人の気持ち思いが伝わった 自己導尿の手順の再確認が必要だと感じた 医療的ケアを必要とする子どもが多いことに驚いた 医療的ケアは講習会に参加して身近に感じた 医療的ケアについてもっと学ばないといけないと思った 導尿が大切だということを実感した 医療的ケアは確実に増えてきているなと思った その子たちへ支援が必要だと思った
II. 地域看護活動の学び	④対象者, 保護者・教員・ボランティアの連携 ⑤思い伝わる・感じる ⑥家族の気持ちが学べた ⑦親の要望が理解できた ⑧地域看護, 講習会開催の必要性	対象者, 保護者, 担任, 養護教諭の連携が大事と思った 保護者との連携が必要 医療的ケアに関する児童・生徒の思い 支える人たちの環境づくり(家族)の大切さを実感した 家族の気持ち(学校の受け入, 保護者と学校側で話し合) 障害のある人たちを支える家族の思いを感じた 保護者・家族からの具体的な会話から学んだ 親の要望はあくまでも生活圏での話である 親の話から学校現場における医療的ケアを身近に感じた お母さんだけでなく, お祖父ちゃんまで含めて家族全てが出来るための計画(地域看護・在宅看護)がいると思う 気軽に, 多くの教員や保護者が参加できてよかった 実際に医療的ケアを必要としている子どもが一般校にいることが理解でき, 地域での講習会が必要であることが実感した 実際に実技がある講習会が大切だと実感した 地域活動は, 単なる技術だけの指導ではなく, 心のケアも必要であることが理解できた 地域で保護者や教員と講習会を開催することの意義が理解できた 真剣に語る保護者の話を聞いて, 養護教諭の地域活動が大切だと思った

さらに, 自己効力感の活用は「できそうかな」と感じた時に行き成功体験をもつことで自己効力感を高めて行くものである¹²⁾。参加者の自由記述では「講習会で実技をしたことでやれそうな気がした」「できそうかな」とのコメントがあり, 自己効力感を高めることができたと判断できる。

③医療的ケアへの支援意欲の向上

自由記述の「今後も講習会に参加して行きたい。」「教員と保護者同士の集まりで励まされた。」「保護者からの声を聞きながら実習したことで, 医療的ケアの必要性が実感できた。」などのコメントからは, 対象中心に考え, 関係者との交流や実体験で支援意欲が向上している。また, 学

生の学びの結果からは、現場の話を直接聞けることで、支援意欲の向上に繋がるという、地域における在宅看護のあり方の重要性が明らかとなったと考える。

今回の講習を受けて教員は、医療的ケアの中では、意欲向上へのつながりが困難な自己導尿に対して、地域における講習会、医療的ケアを実際に必要としている保護者等、養護教諭などの実体験を通して、医療的ケアへの介助意欲や検討意欲の向上が得られた。

④簡潔自己導尿への羞恥心、嫌悪感の軽減という意識変容

学生の学びの結果からは、羞恥心や嫌悪感の軽減という意識変容が見られた。自己導尿の技術習得には、教員や養護教諭にとって自己導尿の介助であったにしろ、羞恥心や戸惑いがある。水野ら¹³⁾の研究では、「看護基礎教育では、看護師が看護技術として患者の性器を触れるという行為に対して、患者のセクシュアリティに配慮するものの、学生のセクシュアリティを重視することなく、切り離し指導している場面も見られる。さらに、患者の羞恥心に配慮する術は伝えられているが、学生が羞恥心をどう乗り越えていくかについては伝えられていない」と述べられているように、学内実習で医療的ケアのビデオを見ただけでは、図1に示したように「羞

恥心、不安、恐怖、嫌悪感、痛そう、可哀想、自信がない」などの感情が先行してしまう傾向が見られた。学生が本講習に参加し、当事者やその保護者、関係者の中での実体験したことは、簡潔自己導尿に対する羞恥心や戸惑いを乗り越える一つの方法であったと考える。

また、「介助できると思うか」との問いに、「とても思う」と答えた教員等は5人(26.3%)と、保護者と比較して低い回答であった。このことは、簡潔自己導尿の介助の経験や見学者が少なかつただけに、学生だけではなく、教員等も羞恥心や戸惑いを感じていたのではと考える。教員としての責任感から講習会に参加したものの、講習会に参加しただけでは、介助が「できる」又は「とても思う」という積極的な回答は出せない状況であったと考える。教員等には積極的に講習会を重ねることや、教員への研修会が必要であると考えられる。

以上のように、保護者および教員等を対象とした自己導尿の講習会は効果的であり、そこに参加した学生には実施意欲や支援意欲を喚起することができ、講習会は有効であったといえる。地域における医療的ケアの講習会は、セルフケア不足である子どもたちの支援に、具体的にどのような援助をするかを、実体験できる講習会であったと考える。

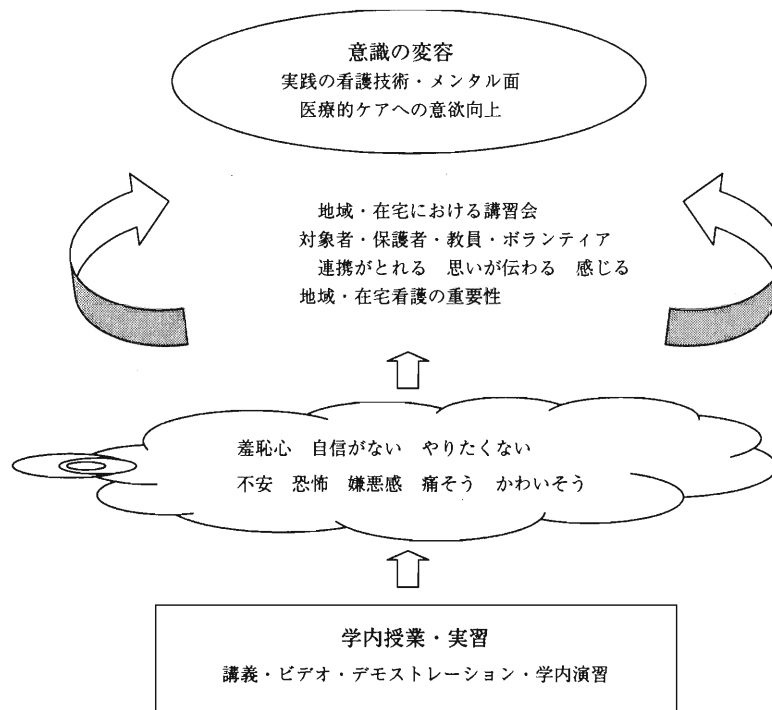


図1 地域看護の実践での学生学び

7. 結論

医療的ケアを必要とする子ども達は年々増加している。このケアを支えるには、保護者や教員のサポートが重要となってきた。本研究では、清潔簡潔自己導尿の講習会について検討を行ったが、吸引や経管栄養などについても同様に、このような講習会の機会を多くし、さらに学生の体験学習の機会が重要であると考え。このような機会を得ることで、学生の技術習得意欲を高め、地域看護を考える重要な機会となり技術意欲の向上につながっていた。

ただし、本研究の対象者の保護者は、二分脊椎症の子どもの保護者がほとんどであり、教員、養護教諭、養護教諭養成課程の学生であることから一般化はできない。今後、地域看護活動における教育のあり方、看護学生教育においても、更なる研究が必要であると考え。

この研究の一部は、科学研究費補助金「医療ニーズの高い子どもに対する共通支援のための研究」（基盤研究（B）研究 課題番号 17330201）の助成を受けて行っています。

引用・参考文献

- 1) ドロセアE. オレム/小野寺杜紀訳：オレム看護論，看護実践における基本概念，第4版，医学書院，116-147，2007，
- 2) 木下由美子：新版在宅看護論，医歯薬出版株式会社，71，2009，
- 3) 前掲 2) 72
- 4) 前掲 2) 9
- 5) 福田博美，本田優子，津村直子，松嶋紀子，津川絢子，葛西敦子，竹鼻ゆかり，永石喜代子：医療ニーズの高い子どもに対する共通支援のための研究，平成17年度～平成19年度科学研究費補助金（基盤研究（B）研究課題番号 17330201）
- 6) 福田博美，本田優子，他7名：学生への医療的ケアの指導方法の検討，治療学研究，愛知教育大学障害児治療教育センター，27，73-79，2007
- 7) 永石喜代子，福田博美：短期大学生への医療的ケアの教育，鈴鹿短期大学紀要，27，93-104，2007
- 8) 大阪府医師会，大阪府教育委員会：『小児の在宅生活支援のための医療的ケア・マニュアル』株式会社ミック大阪，2000
- 9) 永石喜代子，小川裕美：養護教諭に必要な医療的ケア－短期大学における看護学実習－，鈴鹿短期大学紀要，71-87，2010
- 10) 前掲載 2) 72
- 11) 前掲載 2) 72
- 12) 前掲載 2) 72
- 13) 水野昌子・福田博美：男性患者の陰部洗浄におけるセクシュアリティに関する教育の現状と課題，看護教育，医学書院，134-139，2010